

お茶大での交換留学

大連外国語大学
ヨウ シンイ
K2590014

時の流れは早く、あっという間に4か月の月日が過ぎた。目を瞑ると、その間に会った人々や起こった出来事が、まるでプロジェクターのように脳裏に鮮明に浮かび上がる。一つ一つの記憶が色褪せることなく、はっきりと蘇るのだ。

桜が満開の季節に東京、お茶の水女子大学にやって来て、ここで楽しく充実した日々を送った。時を遡れば、初めて学生寮に着いたあの日。重いスーツケースを引きずりながら大雨に降られ、ずぶ濡れの惨めな姿だった。そんな私に、管理人さんが「大丈夫ですよ、慌てずに一步步つゆっくりやりましょうね」と親切に声をかけてくれた。異国で様々な不安を抱えていた心が、その一言で一気に安らいだ。あの優しい気遣いに、心から温かさを覚えた。

お茶大での学習は心地いいと思う。普段、私は気晴らしに図書館に行き、窓辺の席について、ただそこに座り、外の一面に広がる緑に目をやると焦る心が落ち着くし、論文の執筆にももっと集中できる。振り返れば、この前期の大学生活から数多くの貴重な経験を頂いた。「日本中古文文学演習」では、指導教員の松岡先生から古典文学に関する知識を補い、理解を深めることができた。それから、「日本倫理思想史特論」で、長野先生からも色々な指摘を受け、とても勉強になった。市原先生の「日本事情演習Ⅲ」の授業でも、日本での就職に関わる情報をたくさん得て、これから自分の就職活動にも力を入れる勇気がもたらえた。生活の面でも、チューターの秀浦さんも色々と世話をしてくれた。大地震のことで思い悩んでいた時、秀浦さんが防災対策を詳しく教えてくれたので、今は余裕を持って対応できると思う。ここに改めて、感謝の気持ちを込めてありがとうと伝えたい。

毎週、自分は友達と東京の観光スポットや自分が幼い時から憧れを抱いてきた街並みを巡り、常に新鮮で面白いものが見つける。一番印象深かったのは、港町・横浜だった。夜の象の鼻パークは灯が閃いて、隣の赤レンガ倉庫の赤を

より一層艶やかに映し出す。夏の夜風に乗って漂ってくる潮の匂いと、煌びやかな灯りが織りなす横浜の雰囲気は一生忘れがたい。

東京には、もちろん他にも美しい場所が数多くあった。けれど、何よりも懐かしく思い出されるのは、お茶大そのもの、お茶大で出会った人々なのだ。教学棟も、キャンパス内の銀杏並木も、何年経っても思い浮かべるのは、その美しさと愛おしさだけであろう。お茶大で過ごした日々は、私にとって忘れられない大切な思い出となった。

